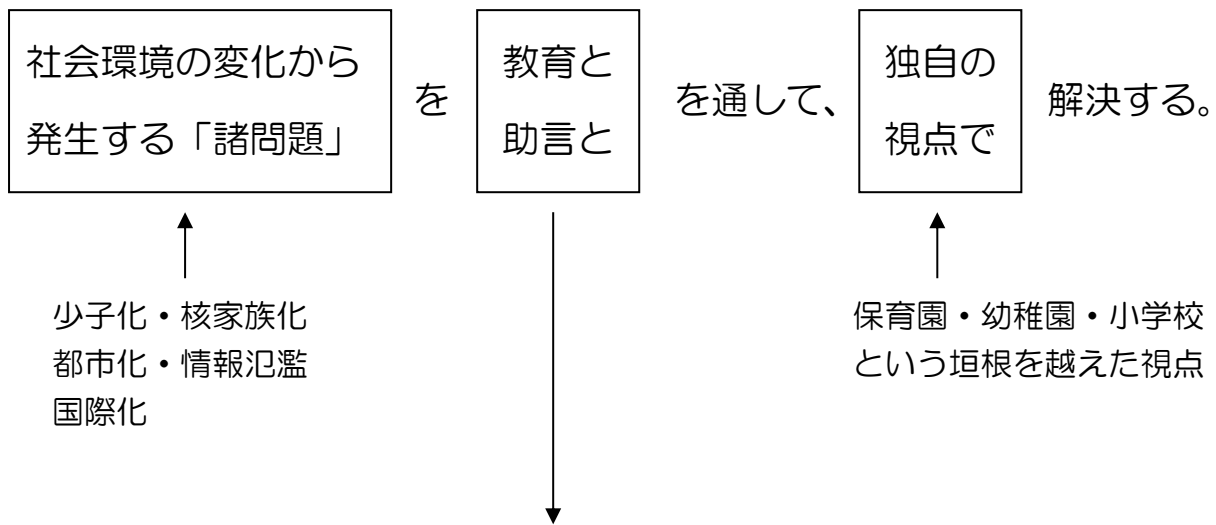


自 令和5年4月 1日

至 令和6年3月 31日

令和5年度 事業報告書



1. 教育事業（教育実践を通して）

- (1) 人と関わる力の育成（幼児とその親）…………… 2
- (2) 考える力の育成（幼児・児童）…………… 4
- (3) 逞しい心と体の育成（幼児・児童）…………… 5

2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

- (1) 育児・教育に関する相談と助言…………… 6
- (2) 実践研究とその成果の公開…………… 7

3. その他（地域社会への還元）

- (1) 文化的活動の「場」の提供…………… 8
- (2) 震災時に避難する「場」の提供…………… 8

1. 教育事業（教育実践を通して）

前記スタンスに基づき、下記のような教室を設置し、社会的諸問題の解決に当たった。

（参加人数は最多在籍月の数値）

（1）人と関わる力を育成する教育

公益目的支出事業①

■はじめての教室（対象：2歳～3歳の幼児とその親）

【内容】 他の親子と継続的に関わりあう「場」を設定し、広々とした環境の中でクラス担任のリードの下、幼児には遊びを通して社会性を身につけさせ、親には適宜、アドバイスをしたり勉強会を開催したりしながら子育てに関する不安を解消させる。

【結果】 今年度も、1歳の募集を見送ったため、2歳児・3歳児コースの親子が上記のねらいに沿って活動に参加した。

「コロナ」は収束の傾向にあるが、依然、保護者の中には感染症に対する不安が少なからずあり、また、コロナのみならず、今後もインフルエンザやノロウイルス等への罹患、受験期の感染蔓延も懸念されることから、人数制限や飲食の規制等の極端な感染対策は緩和したが、検温・消毒・換気の基本の3対策は継続し、保護者への安心感へと繋げた。また、「運動会」や「クリスマス会」などの行事もコロナ以前の大規模開催には戻さず、クラス単位の活動を中心とした開催とした。大規模開催の特徴として、縦割りならではの年齢差による成長の「違い」を感じることができたり、その成長を「目標」と捉えたりできるメリットはあったが、クラス単位の開催とすることでクラスの中で「個」が生きるカリキュラムに焦点を当てて実践。結果として「個」が躍動する場面（クラスの一員として我が子が頑張っている姿）が増えたことで、保護者の満足度も向上、今後の開催スタイルとして「クラス単位での開催」が妥当と判断した。

《1歳児コース》

これまで館内の人的密度を下げてコロナによる感染防止を図る観点から1歳児コースを開設せずにいたが、コロナに収束の兆しが見え、また、行政の扱いもインフルエンザと同等の扱いになったことから当年度こそ開設すべく計画を立てていたが、職員の離職後の補完が折からの人手不足によりできず、当年度も断腸の思いで1歳児コースの募集を見送った。

《 2 歳児コース 》

親から離れての活動になり、可能な限り自分のことは自分で行う姿勢が身につくとともに、集団の中での一員という意識を芽生えさせることができた。

《 3 歳児コース 》

これまでの活動経験から指導者の指示にしっかり従う姿勢が育まれたこと、さらに集団での遊びや共同作業を多く体験することで、他者と力を合わせたり他者を思いやったりする「共同」の心も育てることができた。

参加者 31 人

内 訳 2 歳児 18 人 (週 2 回 年 75 回の保育)

3 歳児 13 人 (週 4 回 年 147 回の保育)

保護者に対する指導 2・3 歳児保護者対象に年 3 回のガイダンス。

希望する保護者に対する個別のカウンセリング。

(2) 考える力を向上させる教育

■言語力UP教室（対象：3歳～5歳の幼児）

【内容】 将来、論理的思考ができる人間に育てるため、「幼児なりに」筋道を立てて物ごとを考える経験をさせておく。

【結果】 今年度も「見る力」「聞く力」「考える力」「話す力」の育成を目指し学齢ごとに様々な切り口から授業を行ってきた。

年少児の「考える力」においては、「どちらが大きい？」「どちらが長い？」のように量を「比較」させることを通して比較に相応しい言葉（形容詞）の習得と使用を図った。大抵の場合、子どもは「大きい・小さい」の2語で済ませてしまうが、「量」を形容する言葉を増やすことにより、その表現が豊かになった。

《重と軽》「お父さんの革靴は重い・ぼくの運動靴は軽い」

《広と狭》「公園は広い・お部屋は狭い」

《多と少》「お兄さんのご飯は多い、私は少ない」

《高と低》「大人は背が高い・子どもは低い」

《大と小》「バスタオルは大きい・ハンカチは小さい」

《長と短》「お母さんのブーツは長い・ぼくの長靴は短い」など。

さらに年中児・年長児において《幅の広と狭》「目白通りは広い・家の前の道は狭い」《厚と薄》「図鑑は厚い・絵本は薄い」、

《深と浅》「プールは深い・水たまりは浅い」《遠と違》「お爺さんの家までは遠い・駅までは近い」などを扱い、年少児から年長児までの3年間で量を表現する形容詞を身に着けることが出来た。

参加者 幼児 56人

内 訳 3歳 26人（週1回・年35回＋言語力診断各1日＋夏季特別授業1日）

4歳 16人（週1回・年35回＋言語力診断各1日＋夏季特別授業1日）

5歳 14人（週1回・年35回＋言語力診断各1日＋夏季特別授業1日）

■学習力UP教室・夏季学習教室（対象：小学生）

【内容】 学ぶ喜びを感じ、自信がもてるよう、基礎学力の定着を中心に確実な学力の底上げを図った。基礎学力の充実が学習意欲の素となり、さらに内容を深めた発展的・応用的な学習に向かうためのエネルギー源となる。それを個に合わせて育てるために、常設教室では教師1人に対し子ども1人または2人の個別指導、夏季教室では1年生6人、2年生8人という小グループ指導での授業を行なった。

【結果】 基本的な学力が定着し、予習を踏まえて授業に臨むなど自主的な学習意欲が身についた。

また、夏季教室は1クラス6～8人で実施したことにより、意見や質問を意識して出し合うことで、相互間の集団思考が働き、小グループならではの学習成果が得られた。

参加者 常設教室 小学生4人 (週1回・年35回)

夏季教室 小学生14人 (夏休み6日間集中)

(3) 体を動かす力を習得させる教育

■体育教室 (対象：2歳児～児童)

【内容】 幼児には、歩く・走る・投げる・回るなどの基本的な体の動きが「満遍なく」できるようにし、「体を動かすことの楽しさ」を幼児期に覚えさせる。

児童には、自分の体を操る基本的能力を「いろいろな運動」を通して身につけさせ、運動に対する「苦手意識」を持たせないようにする。

【結果】 運動関係の習い事は、幼児から小学生まで多種多様、乱立の傾向が目立つ。昨今のスポーツブームからくるニーズも多様化、また、習い事のハードルとしては学習関係と比べると高くないものも多く「入りやすい」側面をもつようだ。しかし、これら乱立する種目への偏重化は、ともすれば偏った運動能力を育てやすいとも言えよう。

そのため当教室では幼児には「全て」の運動に繋がる基礎的な動きをスモールステップで段階を踏みながら習得させ、小学生には特に器械体操に重点を置き、体幹を鍛え、体を操るための基本的な能力を育んだ。その結果、幼児では幼稚園や小学校、小学生では高学年や中学校に進んだ時、跳び箱・マット・鉄棒・ボール運動など、特に時間を割いて取り組んできた種目に対して、自信をもって体現できるようになったという声が寄せられた。

参加者 幼児 2歳 20人 (週1回・年間32回+夏季集中授業4日間集中)

3歳～5歳 78人 (週1回・年間35回+夏季集中授業4日間集中)

小学生 33人 (週1回・年間35回+夏季集中授業6日間集中)

■剣道教室（対象：小学生・中学生）

【内容】 剣道を通して心身ともに自己を強く逞しくする。

【結果】 挨拶・返事、我慢・鍛錬、剣道を通して「礼儀」や「心の強さ」を育み、「与えられた課題に全力で立ち向かう」ことを目標として活動してきた。その取り組みは多くの保護者から理解や支持を獲得、ここ数年、会員数も増える傾向にあったが、他の道場と兼務する指導者の時間的な問題などから、惜しまれつつも当年度末で終講となった。

参加者 小学生 14 名 （週 1 回・年 35 回）

2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

（1）育児・教育に関する相談および助言

公益目的支出事業②-1

【内容】 以下のような形で育児や教育に関する相談を受ける。

- ①前記教室に参加する親からの相談を随時受ける。
- ②教室に通えない親の電話相談や来訪相談等にも応じる。

【結果】 2～4 歳児の保護者から相談があり、その多くは子どもの特性と波多野を卒業した後の幼稚園に関わるものであった。相談内容としてはどのような幼稚園生活を送らせていけばよいかについて、また、就園前に幼児の社会性を育むためどうすればよいかについての相談など、合わせて 21 件の来訪による相談を受けた。

（2）実践研究とその成果の公開

公益目的支出事業②-2

①帰国外国人児童生徒教育の支援

【内容】 日本語力が不十分な児童生徒の言語習得、教科学習フォローの仕方について、小中学校等の教員、ボランティア指導者の相談に応じる。コロナ禍の中でも日本の学校に入学してくる児童生徒は令和 1 年⇒3 年比で 9480 人、率にして 7.7%も増えている（「外国人の子供の就学状況等調査・文科省）。一方で、教育現場では教員不足により指導者を十分に確保できているとは言い難いと言える。そこで、過去、先進的な研究と実践をしてきた当財団の知見を提供することは依然として重要だと認識している。

【結果】 今年度も研修講師派遣の依頼があったが、今年度は教育現場との繋がりを重視し、小学校 3 校、高校 1 校で直に支援を行った。研修会での助言はどうしても一般的な話になりがちだが、研修を受けた教員が実際に目の前の子どもにどう応用するかという点で、支援は重文でなかった。そこで、今年度は実際にどのような教材を与えれば子どもの学習意欲が掻き立てられるのかを教員に示すため、個々の子どもに応じた教材提供を行った。バスケットボールに夢中の児童、AKB が好きな児童、化け物の話が好きな児童、先生ごっこがしたい児童、卒業を前にワンランク上の日本語力を付けたい高校生たち。それぞれのニーズに合った教材約 200 ページ分を作成して授業で使ってもらい、教員から「大変助かった。」と感謝の言葉が寄せられた。

②研究・調査とその公開

【内容】

当財団が実施している教育、実施した教育の成果をホームページなどで公表し、教員等が活用できるようにする。

【結果】

ア) 帰国外国人児童生徒用「日本語教材」の公開

初期指導のテキストは数多く出版されているが、初期以降の子どものニーズは多様でそれに対応した教材はまだ少ない。そこで、自主作成した教材を当財団のホームページ内で公開している。今年度は都道府県からの研修養成に応じられなかったため、そのページを告知する機会がなく、昨年度よりアクセスが減ったが、それでも 483 のアクセスが記録された。

イ) 児童用「作文教材」の公開

当財団では、感想文が主体の日本の作文教育に一石を投じた「発信力 UP 教室」を開催していたが、その教室で開発した教材を、多くの教育関係者に利用してほしいと思い、令和 2 年度より教材の整理と公開を開始した。論理的な思考力に基づいた作文にするため、短い文章で事象を的確に表わすための力を養成する教材を公開した結果、昨年より 100 件多い、804 件のアクセスがあった。

③本事業の今後

ア) 相談内容の幅を広げる

現在は幼児の成長を促す方向での相談を受けたが、人と関わる場面で問題が生じた子どもの相談に応じてほしいという問い合わせもあった。しかし、これらは相談で留まることなく、実際にその子ども自身に対応することが大事であり、

そのための「人材」と「場」の確保が必要である、そのため、令和6年度の事業として新たに「ホースセラピー」を始動すべく、ホースセラピーを行い得る土地と建物を群馬県安中市に確保した。

イ) 帰国外国人児童生徒教育の支援対象

当年度は現場の実情を知るための活動に力を入れたため、研修会への講師派遣を断ってきた。しかし、現場への支援は一部の学校に限られるため、やはり研修会も引き受けていく必要があると反省した。とりあえず、来年度の研修としてすでに講師派遣の養成がある東京都教職員研修センターの依頼は受けた。

ウ) 公開の幅を広げる

現在は、児童生徒向け日本語教材や児童むけ作文教材の公開を行っているが、当財団では他にも幼児対象の教育を行っている。幼児なので教材の公開という訳にはいかないが、具体的な指導方法（指導案）の公開は可能である。今後は幼稚園では扱っていない領域の教育内容を公開することで、幼稚園や幼児教室での利用を目指すことも考えたい。

3. その他（地域社会への還元）

財団の事業としては位置づけていないが、必要に応じて次のような協力をした。

(1) 文化的活動の「場」の提供

【内容】近年、地域の人々の文化的活動が活発になってきているにも拘わらず、公民館などの公共の場の確保が難しくなっている。そこで、活動の場を無償または実費で提供することで、文化的活動のサポートを行う予定である。

(2) 震災時に避難する「場」の提供

【内容】地震に対する備えを進め、震災時に地域の人々の避難場所となるようにする。

【結果】今後、予想される東京直下型の地震の時は、会員でも相当多くの帰宅困難者が出るほか、歩いて帰宅する一般住民が途中で帰宅を断念し、宿泊する場所を必要とすることも考えられる。そのような事態に対応できるよう毛布や食料などの備蓄量を増やす方向で検討を進めている。今年度は幸いにもこの協力をしなくてもすんだ。